



教育 鷺尾 勘解治

70  
まいん

じきょうしゃ  
自彊舎

しょうわどお きょうぞん きょうえいばし  
昭和通り (共存・共栄橋)



自彊舎

じきょうしゃ  
自彊舎

は、明治45年(1912)、若い鉱山従業員の精神的な向上を図る必要性を痛感した鷺尾勘解治(のちの別子鉱業所労働課長、住友別子鉱山事務取締役)が、旧別子地区の山麓で飯場跡を借り受け、私塾として発足したのが始まりです。

鷺尾の熱き思いを  
今も受け継ぐ



鷺尾勘解治像

わしおかげじ  
鷺尾勘解治

は、自ら志願しての坑内作業や学生時代の禅の修行経験を生かして、青年坑夫の教育を図りたいと総理事の鈴木馬左也に申し出て了承を得ました。塾名は鈴木馬左也によるものです。大正5年(1916)採鉱本部が旧別子地区の東延から東平地区へ移ったため、自彊舎もそれにともない、呉木へ移転しました。

その後、一時閉鎖もありましたが、大正15年11月には別子鉱業所の施設として再興され、川口新田(現在の角野新田町)に本塾が、東平、四阪島に支塾が設置されました。

塾生の生泊は寝食を共にし、塾より出勤、退勤後は自習し、静座などをして過ごしていました。昭和20年(1945)の終戦まで存続しました。

現在の自彊舎は昭和33年に建設されました。今なお、鷺尾の命日に当たる毎月13日には、鷺尾を慕う人が集い、その意思が受け継がれています。

しょうわどお  
昭和通り

は、昭和6年7月に完成しました。

当時は、わずかな集落と水田だけの場所に幅約15メートルの道路が計画されましたが、広すぎるとして、約11メートルに縮小されました。



共栄橋



共存橋

きょうぞん きょうえいばし  
共存・共栄橋

は、「住友がこの地に銅山に代わるべき事業を起こし、その事業が栄えてこそ新居浜の繁栄が期待できる」という共存・共栄の思いから鷺尾によって命名されました。

